

神の似姿

—ツェレム(šelem)/ドゥムート(d'mût)と εἰκόν/ὁμοίωσις—

柘 暁 生

はじめに

ここで考察するのは、キリスト教の人間理解の中心となっている創世記の「神の似姿」の問題である。ただ、この大きな課題を全面的に展開するのは当然無理である¹⁾。それゆえ、限られた紙面の中で、マソラ・テキスト(=MT)のヘブライ語と、70人訳聖書(=LXX)のギリシア語の「神の似姿」に関する語の意味と用法を探究し、それぞれを比較考量し、主として言語学的な観点からの研究に焦点を絞って論述したいと思う。考察の起点となるのは「われわれのかたち(ツェレム, εἰκόν), われわれにかたどって(ドゥムート, ὁμοίωσις)人を造り」(創1:26)という箇所である。

[I] ヘブライ語ツェレム(šelem)とドゥムート(d'mût)

(1) ツェレム(šelem)

創世記1章26節で使われているヘブライ語男性名詞のツェレム(šelem, 像)は、アッカド語 šalmu(像)との関係が考えられ、動詞 šlm(切る)に由来すると言われている²⁾。近代の聖書学が明らかにしたように³⁾、聖書の「神の似姿」の思想的背景には古代オリエントの王の観念があり、この単語の重要性は大きい。

アレクサンドリアのフィロンは、ツェレム(šelem)はツェル(sel, 影)と関係すると考え、出エジプト記に登場する聖所の細工職人ベザレルの名前を「神の影に於いて」の意味であるとする⁴⁾。神の影とは神の言葉であり、神は εἰκόν の原型(παράδειγμα)であると言って、創世記1章26節を引用する。現在では W. H. Schmidt などを除いてこの説は支持されていないが、詩編39:7(38:7), 73:20(72:20)のツェレムを影と訳す翻訳——口語訳聖書など——もある。

さて、ヘブライ語ツェレムは旧約聖書の中で17回使われている⁵⁾。創世記1章~9

章（5回）の祭司資料（=P）の原初史の中では「神の似姿」の意味で用いられているが、その他（12回）では「像」として、あるいは神像、あるいは偶像を表現し、形象の意味でも使用されている⁶¹。

この語の一番古い用例はサムエル記上6章5、11節の「腫れ物の像」、「ねずみの像」と訳されているもので、神々の戦いの神話の痕跡をとどめる話の中にあらわれる。像の持つ魔術的な意味合いを表現するものであるが、ここには像に対する否定的な見方はない。ツェレムが偶像の意味で否定的に見られるのは5回ほどであって、全体からすれば多くはない⁷¹。創世記1章～9章の中でツェレムが5回神の似姿の意味で肯定的に使われているのは祭司資料の神学にもとづくことである。

ところで、旧約聖書の神の似姿が何を意味するかについては古来、論議されて来た。ただ近年の古代メソポタミアやエジプトの研究結果などから考えれば、創世記の人間が神の似姿であるというのは、古代オリエントの王が神の子として、地上における神の似姿、神の代理者としての役割を果たすという考えに基本的に共通するものである。エジプト、あるいはメソポタミアの王は神の地上の代理者として民を統治してゆくが、彼らは自分の像を造り、それを自分の支配領域に立て、これをもって自分がこの地域の支配者であるということを示そうとした。王の立像があるのは王の権威、威力が及ぶ範囲である⁸¹。

聖書に於いては王ではなく、人間が神の似姿と言われているが、それが基本的に意味することは、地上の生き物を統べ治めていくという責務である。人間にまかせられた地上の動物を責任を持って正しく治め（rādā）、従わせる（kābaš）ことが神に似た者として造られた人間の第一義的な任務である。

（2）ドゥムート（d⁶mūt）

ドゥムートは「似ている」を意味する動詞ダマー（dāmā I）から派生した抽象名詞である⁹¹。それゆえ、この女性名詞の基本概念は「似ていること」であって、「類似」、「相似」を意味する¹⁰¹。副詞的には「～のように」と使われ、同根の名詞ディムヨーン（dīm⁶yôn、詩17:12）もやはり似ていることをあらわし、名詞ドゥミ（d⁶mi、イザ38:10）は半分、等分を意味する。

この語はアラム語からの借用語と言われ、他の古代近東諸語との関係が見られない。比較的新しい単語であって、ドゥムートの用例は主として捕囚期、捕囚期以後に限られる。

旧約聖書の中でドゥムートは 25 回用いられている¹¹⁾。そのうち半分以上 (16 回) はエゼキエル書である。特に 1 章 (10 回)、10 章 (4 回) が多く、1 章のエゼキエルの召命のヴィジョンの中では、外見にあらわれる姿、形をあらわすものとして頻繁に出て来る。

エゼ 23 : 15 には「～これらはみな官吏のような姿 (マルエー) で、その生れた国カルデアのパピロン人に似ていた (ドゥムート)」とあるが、この箇所は前節の「～すなわち朱で描いたカルデアびとの像 (ツェレム)」の続きで、ツェレムとドゥムートが対になって出て来ている。これは創世記 1 章～5 章の祭司資料に酷似する。

この語の一番古い用法はおそらく列王記下 16 : 10「その詳しい図面 (d⁴mūt) とひな型 (tab⁴nit) とを作って祭司ウリヤに送った」という箇所であろう。これは祭壇の設計に関するもので、ドゥムートとタブニットが類義語として並列的に記されている¹²⁾。このドゥムートは、おそらく具体的な祭壇を測量して実写したコピーとでも言うべきもので、あらたに祭壇を造るための設計図と考えられる。

ドゥムートの意味は、基本的には何物かをもとにして、それに等しい似たものをあらわすということである。ここには少し抽象的なニュアンスがあるが、外見的に対応する関係が認められる。創 1 : 26 と 5 : 3 で、ドゥムートはツェレムと対になってあらわれる。創 1 : 26 では神と人との関係で、創 5 : 3 では父と子の関係で言われている。人は神に似たものとして造られ、子は父に似たものとして生まれると記されている。主体は神であり、父であり、その相似性、類似性を持つ者として、人があり、子があるということである。

ところで、この神と人、父と子の関係は順序は異なるがツェレムとドゥムートという二つの語で言い表されている。この二語の並列が何を意味するのか、次にそれを考えてみたい。

(3) ツェレム (selem) とドゥムート (d⁴mūt)

人間が神の似姿として、あるいは神の姿に従って創造されたということが¹³⁾、何故ツェレムとドゥムートの二語でもって言い表されているのか、現代の研究者はヘブライ語の両語の持つ意味の差異から検討している¹⁴⁾。その結果、まず第一に言えることはツェレムが神の似姿をあらわす基本的な単語であって、ドゥムートはその補足的な単語であるということである。ラテン語に於いて一般的に *Imago Dei* と言われ、*Imago et Similitudo Dei* とは言われていない¹⁵⁾。また普通、日本語に於いても「神

の似姿」という単純な言い方をし、新約聖書ギリシア語に於いても、“*ἐν ὁμοιώματι εἰκόνης*” (ローマ 1 : 23) と *εἰκών* と *ὁμοίωμα* との複合は一度あるが、*ὁμοίωσις* と並列的に言われることはない。

ツェレムとドゥムートは創世記 1 章～9 章の中で、あるいは並列され、あるいは置換され、餺飩の形式でしっかりと組み合わせられた様相を呈してあらわれる。

- 1 : 26 前置詞 $b^e + \text{ツェレム} + 1 \text{ pers. pl.}$
 前置詞 $k^e + \text{ドゥムート} + 1 \text{ pers. pl.}$
- 1 : 27 前置詞 $b^e + \text{ツェレム} + 3 \text{ pers. sg.}$
- 1 : 27 前置詞 $b^e + \text{ツェレム} + \text{神}$
- 5 : 1 前置詞 $b^e + \text{ドゥムート} + \text{神}$
- 5 : 3 前置詞 $b^e + \text{ドゥムート} + 3 \text{ pers. sg.}$ 及び
 前置詞 $k^e + \text{ツェレム} + 3 \text{ pers. sg.}$
- 9 : 6 前置詞 $b^e + \text{ツェレム} + \text{神}$

ツェレムは 5 回、ドゥムートは 3 回の割合であり、「神のツェレム」が 2 回、「神のドゥムート」が 1 回である。そのあらわれ方も祭司資料の主要な箇所ではツェレムがドゥムートに対して優勢的な位置にあり、前置詞は常に b^e が先行し、 k^e は後続している。創 5 : 1～3 は人間 (アダム) の系図の書の最初で、神と人 (*’ādām*)、及びアダム (*’ādām*) とセトの関係でドゥムートが先行している。これは人間に焦点を合わせているからであって¹⁶⁾、創 1 : 26 は神に主眼があって人間の創造が言われているのでツェレムが先行しており、両者は丁度とキアスム (X 字型) の様式で表現されている¹⁷⁾。

- 1 : 26 神と人 = $b^e + \text{ツェレム} + 1 \text{ pers. pl.}$ $k^e + \text{ドゥムート} + 1 \text{ pers. pl.}$
 5 : 3 父と子 = $b^e + \text{ドゥムート} + 3 \text{ pers. sg.}$ $k^e + \text{ツェレム} + 3 \text{ pers. sg.}$

以上の言語学的な統計や分析よりしても、ツェレムの方がドゥムートより優勢であることがわかる。これはツェレムの方が主要な語であって、ドゥムートを付加することによって、ツェレムがさらに詳しく説明され、厳密に規定されていると言える。ただ創世記 1 章～9 章の中でこの二語の区別は意味論的にはさほど大きくはなく、両者は類義語であって¹⁸⁾、神と人の類似性をこの二語であらわそうとしたものと考えられる。LXX にあっても事態は同じで、ツェレムの訳語 *εἰκών* の方が、ドゥムートの訳語 *ὁμοίωσις* よりも多く用いられており、意味論的にも *εἰκών* の方が重要である。

〔II〕 ツェレム (šelem) とドゥムート (d'mût) の LXX 訳語

(1) ツェレム (šelem) の LXX ギリシア語訳

(i) ヘブライ語ツェレムは LXX で四つのギリシア語に訳されている。εἰκών が主で 11 回¹⁹⁾、ὁμοίωμα (サム上 6 : 5)、τύπος (アモ 5 : 26) がそれぞれ 1 回ずつ、εἰδωλον (民 33 : 52, 代下 23 : 17) が 2 回である。旧約聖書でヘブライ語ツェレムが 17 回あらわれるのに対し、その LXX ギリシア語の訳語が全部合わせて 15 回というのは、創世記 1 章 27 節、サム上 6 : 5 でツェレムの翻訳が省略されているからである。

εἰδωλον (民 33 : 52, 代下 23 : 17) は、εἶδος (<εἶδω) に由来する単語で似像、心像、形象、影像、幻影などの意味で、LXX では 15 語にわたるヘブライ語の訳語として頻繁に出て来る。ツェレムの訳語としては二度だけしか使われていないが、これはヘブライ語には偶像をあらわす語彙が豊富であるのに対し、ギリシア語にはそれに対応する単語がほとんどないということをあらわしていると言える。

しかし、このギリシア語はその後、キリスト教世界の中で「偶像」の代表的な語彙となる。おそらくそれは十戒 (出 20 : 4, 申 5 : 8) の中にある偶像禁止の言葉に由来するからであると考えられる。この中で「刻んだ像」(ペセル, pesel) の訳語として εἰδωλον が使われている。

ὁμοίωμα (サム上 6 : 5) は LXX で、ヘブライ語ドゥムート (d'mût, 17 回)、タブニット (tab'nit, 8 回)、トゥムナー (t'mûnâ, 7 回) その他の訳語として用いられている。申命記 4 : 12~25 のシナイ山における神のモーセに対する顕現の記述の中で、ὁμοίωμα はタブニット (像) の訳語として 5 回、トゥムナー (形) の訳語として 5 回使われている。この箇所だけで ὁμοίωμα が合計 10 回繰り返されるのである。この語もやはり偶像をあらわすのにヘブライ語より包括的な単語であるということが出来る。

τύπος (アモ 5 : 26) は LXX で 4 回出て来るが、出 25 : 40 ではタブニットの訳語として「型」の意味で使われている。「そしてあなたが山で示された型 (tab'nit) に従い、注意してこれを造らなければならない」(出 25 : 40)。この箇所は祭司伝承に属し、T. Mettinger は創世記 1 章 26~27 節の「神の似姿」の解釈を「幕屋の建設」との比較でこころみている²⁰⁾。アモ 5 : 26 の MT と LXX にはテキストの異同が

見られるが、偶像の意味のツェレムを LXX は *τύπος* と訳している。この *τύπος* はやはり偶像の意味で、3 マカ 3 : 30 では「(手紙の) 文面」、4 マカ 6 : 19 では「(不敬虔の) 模範」で、*τύπος* に偶像の意味があるのは LXX ではアモス 5 : 26 だけである。

(ii) ところで、*εἰκών* は LXX に於いてヘブライ語のツェレム (*selem*) 以外に三つのヘブライ語、一つのアラム語の訳語としてあらわれる。ヘブライ語では、創 5 : 1 のドゥムート (*d'mût*, 像)、イザヤ 40 : 19, 20 のペセル (*pesel*, 偶像)、申 4 : 16, 代下 33 : 7, エゼ 8 : 5 のセメル (*semel*, 像, 偶像)、アラム語ではダニエル書 2 章～3 章のツレム (*š'lem*, 像) である。ドゥムート (*d'mût*) は後述するとして、他の単語を簡単に見てみると、ペセル (*pesel*) は主として偶像の意味で使われることが多く、「あなたは自分のために、刻んだ像 (ペセル) を造ってはならない、～どんな形 (トゥムナー) をも造ってはならない」(出 20 : 4, 申 5 : 8) という十戒の中に典型的にあらわれている²¹⁾。ここでペセルはトゥムナーと対になっているが、このペセルはセメルと並行的に申 4 : 16, 代下 33 : 7 で使われている。セメルは MT で 5 回出て来るが、その意味はすべて偶像をあらわし、上述の 3 回は *εἰκών* と訳されるが、他には *στήλη* (エゼ 8 : 3) と *γλυπτός* (代下 33 : 15) と訳される。ダニエル書のアラム語ツレム (*š'lem*) はほぼ機械的にすべて *εἰκών* と訳されている。

(iii) 以上はヘブライ語の訳語としての *εἰκών* であるが、さらにヘブライ語の対応がない、LXX のみに見出しされる *εἰκών* が知恵の書に 8 回、シラ書に 1 回ある。知恵の書ではそのうち 5 回が偶像の意味で用いられており、すべて被造物礼拝を述べる 13 章から 15 章にかけて集中している。残る三箇所中、17 : 20 はエジプト脱出に際しての第九の災いに関する「(闇の) かたどり」であり、7 : 26 は知恵に関係して、それが「(神の善の) 姿」であると言われている。「知恵は永遠の光の反映 (*ἀπαύγασμα*)、神の働きを映す曇りのない鏡 (*ἔσοπτρον*)、神の善の姿 (*εἰκών*) である」²²⁾

そして、2 : 23 は創 1 : 26-27 の「神の似姿」と関係する。「神は人間を不滅なもの (*ἐπ' ἀφθαρσίᾳ*) として創造し、御自分の本性の似姿 (*εἰκών*) として造られた」ただ、創 1 : 26-27 では言われていない不死性が、知恵 2 : 23 では特に付け加えられている。もちろん創世記 3 章の墮罪の前の状態を考えれば、考えられないこともないわけであるが、創世記 1 章の人間創造の本来の意図は、神が造られた動物を人間が治めてゆくということであって、祭司資料の「神の似姿」は直接に死の問題とは関わら

ない。間接的に関わるとすれば創9：6であるが、そこで言われているのは血を流すことの禁止であって、直接的に死が意味されているわけではない。死の問題はヤーヴィストの創2：17、3：3、4で「死ぬ、死なない」の可能性の問題としての発言があり、3：19では「土に帰る」という表現で神による死の告知があり、3：22では「永久に生きるかも知れない」という楽園追放以前の人間の状態が述べられている。

また、「*εἰκόνα τῆς ἰδίας ἰδιότητος*」「御自分の本性の似姿」に関しては、まず第一に本文批判の問題がある。*ἰδιότητος* (本性) と読むのか *ἀϊδιότητος* (永遠) と読むのかということである。Rahlfs 版では *ἀϊδιότητος* であるが、Ziegler 版では *ἰδιότητος* で、多くは後者を取る²³⁾、ここでも *ἰδιότητος* と読むが、創1：26等と違い、前置詞 *κατά* はない。MT が「神の似姿」を語る時は常に前置詞 (b'/k') を持ち、それらの箇所も、必ずしも同一の訳ではないが常に前置詞 (*κατά/έν*) をつけて翻訳するのとは違う。旧約聖書の「神の似姿」が前置詞を取らないのは LXX のこの箇所だけである。MT の「神の似姿」の考えに、人間の不死性は直接には関連づけられていないが、知恵2：23での *εἰκών* は、ある意味で魂との関係で見られており、人間の本性には不死性があり、それは神に基づくということである²⁴⁾。

次にシラ書 (Ecclesiasticus, [集会の書]) であるが、17：3は *καθ' ἑαυτὸν ἐν-έδυσεν αὐτοὺς ἰσχὺν καὶ κατ' εἰκόνα αὐτοῦ ἐποίησεν αὐτούς* 「主は、御自分と同じような力を彼らに帯びさせ、御自分に似せて彼らを造られた」という文言で、3節は前半と後半が並行文である。

シラ17：1～5は人間の創造が主題であって、創1：26、27の祭司資料と創2：7、3：19のヤーヴィストを合成して記述している。ただ、人間が創造されたのは、地上の生き物を治めることであるという祭司資料の考えの方が強調されている。それは3節をはさんでの前後関係、すなわち2節の「地上のものを治める権能 (*ἐξουσία*)」と4節の「獣や鳥を支配させられた (*κατακυριεύω*)」によって明白である。

κατακυριεύω は、創1：28でカバシュ (*kābaš*) 「従わせる」の訳語として使われており、*κατά+κύριος* からなる複合動詞である²⁵⁾、LXX の創9：1では MT にはない *κατακυριεύω* が挿入されているが、これは創1：28とのテキストの調整によるものであると推測される。

シラ17：3は *καθ' ἑαυτὸν+ἰσχὺν* と *κατ' εἰκόνα αὐτοῦ* との並行から力 (*ἰσχὺς*) と像 (*εἰκών*) との関連が読み取れる。また、2節の権能 (*ἐξουσία*) と3節 a の力

(*ισχύς*) は類義語としてあり、3節bの像(*εἰκών*)と4節の治める(*κατά+κυρεύω*)の関係は像(*εἰκών*)が主(*κύριος*)であるということであらわすと同時に、*κατά*という接頭語で、3節の前置詞 *κατά* と強く結び付いている。

(2) ドゥムート (*d'mût*) の LXX ギリシア語訳

ヘブライ語ドゥムートは LXX では五つのギリシア語があてられている。第一が創5:1の *εἰκών* である。*εἰκών* は前述したように、基本的にはツェレムの訳語である。創5:1で“ドゥムート エロヒム”のドゥムートを *εἰκών* と訳したのは、創1:27の“ツェレム エロヒムム”の“ツェレム”を *εἰκών* と訳しているのに調和させたと考えられる。LXX では創1:27と5:1の構文が前者は *τὸν ἄνθρωπον*, 後者は *τὸν Ἀδάμ* という違いがあるだけである²⁶⁾。MT での相違はもっと顕著であるだけに、LXX の翻訳の意図的な構図、整合化が見受けられる。

創1:27 *ἐποίησεν ὁ θεὸς τὸν ἄνθρωπον κατ' εἰκόνα θεοῦ ἐποίησεν αὐτόν.*

創5:1 *ἐποίησεν ὁ θεὸς τὸν Ἀδάμ κατ' εἰκόνα θεοῦ ἐποίησεν αὐτόν.*

次に創5:3の *ιδέα* (*είδεια*) がある。アダムとセトの父子関係で、父が子で自分のドゥムート (*ιδέα*) として、ツェレム (*εἰκών*) として生んだと言っている箇所である。これは創1:26で神と人との関係に於いて、神が人を自分のツェレム (*εἰκών*) として、ドゥムート (*ὁμοίωσις*) として造ったと言っているのに対応する。LXX でヘブライ語の二つの前置詞 (*b' & k'*) は、創1:26でも創5:3でも、どちらでも同じく *κατά* と訳されている。また前述したように、MT でツェレムとドゥムートは創1:26と創5:3では順序が入れ替わっているが、LXX は基本的にはそれに従いながらも、ドゥムートを創1:26では *ὁμοίωσις*, 創5:3では *ιδέα* と訳す。

創1:26 *κατ' εἰκόνα ἡμετέραν καὶ καθ' ὁμοίωσιν*

創5:3 *κατὰ τὴν ιδέαν αὐτοῦ καὶ κατὰ τὴν εἰκόνα αὐτοῦ*

LXX で *ιδέα* (*είδεια*) は6回あらわれるが²⁷⁾、ヘブライ語の訳としてあるのは、創5:3(ドゥムート)の他にはダニ(Th) 1:13(2回), 15で、これはヘブライ語マルエー (*mar^{eh}*) 「外観, 相貌」を訳したものである²⁸⁾。ヘブライ語の訳ではない2マカ3:16では大祭司の「姿」、エレミヤの手紙62では偶像批判との関係で「様」^{ἰδέα}の意味であらわれる。以上の用例から考えられることは、創5:3で *ιδέα* が使われているのは、おそらくこの語の「外観, 相貌」という古い意味での用法であり、

eikón でもなく *ómoiōsis* でもないのは、特に父と子の類似を言おうとするためであって、神と人の相似ではないからであると考えられる²⁹⁾。

第三にイザ 13 : 4 のみで訳されている *óμοιος* がある。「聞け、多くの民のような (*óμοιος*) 騒ぎ声が山々に聞える」。LXX でこの語は多くのヘブライ語の訳語として頻出するが、新約でも多く用いられている。その中でも「神の似姿」との関係であられるのは 1ヨハネ 3 : 2 である。「彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るもの (*óμοιοι αὐτῷ*) となることを知っている。そのまことの御姿 (*καθὼς ἴσταν*) を見るからである」。

第四に *óμοίωμα* がある。先に述べたように *óμοίωμα* は *selem* の訳語として王上 6 : 5 で 2 回用いられているが、ドゥムート (*d'mút*) の訳語としては *óμοίωμα* が一番多く使われており、それもエゼキエル書がほとんどである。*óμοίωμα* がドゥムートの訳語として出て来るのは他に王下 16 : 10、代下 4 : 3、イザ 40 : 18 であるが、イザ 40 : 18 のみ偶像の意味で使われている。*óμοίωμα* がタブニット (*tab'nit*) 「像」やトゥムナー (*t'múnà*) 「形」の訳語としてある場合は「偶像」の意味であるのと大きな違いがある。

第五に *ómoiōsis* がある。このギリシア語は LXX の中で、ヘブライ語ドゥムート (6 回)、あるいはタブニット (1 回)、トクニット (*tok'nit*, 1 回) の訳語として使われている。タブニットの訳語としてエゼ 8 : 10 では偶像の意味で、トクニットの訳語として同 28 : 12 では印章との関係での相似性が言われている。ドゥムートの訳語として、エゼ 1 : 10、10 : 22 では「(顔の) 形」が類似しているという意味で、詩 57 (58) : 5、ダニ (LXX) 7 : 5、10 : 16 では何ものと比較しての類似をあらわし、「～のような」の意味を持つ。

ところで、創 1 : 26 はどうかと言うと、これはエゼ 1 : 10、10 : 22 が「人の顔の形」との類似、ダニ 10 : 16 が「人の子の姿」との類似をいうのに似ている。創 1 : 26 で人間が神の *eikón* にしたがって、*ómoiōsis* にしたがって創造されるというのは、*ómoiōsis* がここで単なる類似——この語の本来持つ意味——ではなく、やはり形との関係 (*eikón*) に於いて似ているということが示唆されていると考えられる。

(3) *eikón* と *ómoiōsis*

eikón と *ómoiōsis* は創 1 : 26 に於いてのみ並列的にあらわれる。LXX で *eikón* は約 40 回使われているのに対し、*ómoiōsis* はより少ない 8 回である。*eikón* は主と

してヘブライ語ツェレムの訳語であり、*ὁμοίωσις* は主としてドゥムートの訳語である。ただドゥムートは前述したように、創5：1では *εἰκών* と訳され、創5：3では *ιδέα* と訳される。*εἰκών* は *ἔοικα* (<*εἶπω*, 似ている) に、*ὁμοίωσις* は *ὁμοίω* (<*ὁμοιος*, 似せる) に由来する。どちらも意味論的には似通っており、類義語として把握される。ただ *εἰκών* はそこから具体的な像 (*imago*) などの意味を持つようになるのであるが、*ὁμοίωσις* は類似 (*similitudo*) の意味を持つにとどまり、J. Schneider の言うように、*εἰκών* の方がその原型を想定するのに対し、*ὁμοίωσις* は単なる類似を表現するということである³⁰⁾。LXX の訳者は人間が神の似姿であると言う時、*ὁμοίωσις* より *εἰκών* の方に重きを置いていると言ってさしつかえないであろう。それはヘブライ語ツェレムとドゥムートの関係に酷似している。

おわりに

以上、我々は旧約聖書の「神の似姿」の問題を、MT のヘブライ語及び LXX のギリシア語に焦点をあてて概観してきた。LXX に関しては、そのギリシア語訳がヘブライ語の意味を正確に伝えているかどうかの問題があるが、この両語に限って言えば元来の意味をそこなうことなく、調和を保って翻訳され、旧約から新約へのよき橋渡しを形成したものとなっており、ツェレムの持つ意味を *εἰκών* はいささかも減じていないと考えられる。勿論、ヘブライ語とギリシア語の持つ微妙なニュアンスの相違は否むことは出来ないが、ツェレムは *šlm* (切る) を語根とし、*εἰκών* は *ἔοικα* (似ている) を語根とし、その由来は異なりつつも、共に「像」の意味を持つに至り、ほとんど同じ意味合いで使われていると言ってさしつかえないであろう。この両語は聖書の人間観、「神の似姿」の主要な鍵語となって、後世に大きな影響を及ぼすこととなる。また、ドゥムートと *ὁμοίωσις* は、ともに語根が「似ている」という同じ意味であり共通する。それゆえ、LXX はある意味で容易にヘブライ語が元来表現しようとしていたことを伝えたといえることができるであろう。神の似姿に限って言えば、我々は D. Frankin とともに LXX はヘブライ語のテキストに何も新しい解釈を提示しないと考える³¹⁾。ツェレムは近隣の古代オリエント世界の影響を受けながら、聖書独自の神学に基づいてその人間観を大きく転換したのであるが、*εἰκών* は聖書の伝統とギリシア思想——特にプラトン——との対話の中で大きく成長し発展を遂げ、それはキリスト論に於いて完成を見、キリスト教の教父達に受け継がれてゆく。「キ

リストは見えない神のかたち (*εἰκών*) である」(コロ 1:15)。

註

- 1) 多くの参考文献があるが、聖書学の研究史の観点から概観した、G. A. Jonsson, *The Image of God —Genesis 1:26-28 in a Century of Old Testament Research—* (CB OTS26 1988) が簡便である。
- 2) H. Wildberger, “šaélaem, Abbild”, *THAT* II, 556. *AHW* 1078f. *BDB*. 853, *HAL*. 963. ヘブライ語ツェレムは *šlm I (切る) との関係を *HAL* は明示する。ウガリト, フェニキア, アラム, アラブ諸語との関連もある。
- 3) J. Hehn, “Zum Terminus *《Bild Gottes》*”, *FS E. Sachau* (Berlin 1915) をもって嚆矢とする。
- 4) “ἐν σκιά θεοῦ” *Legum Allegoriae*, III. 96. ヘブライ語の b'zal'el を b' (に於いて) +šel (影) +'el (神) と解釈する。ただ、フィロンはヘブライ語を直接には知らなかったと言われている。フィロンの σκιά と εἰκών の関係については S. Schulz, “σκιά” *TDNT*. vol. 7, 396. 参照。
- 5) 創 1:26, 27 (2x). 5:3. 9:6; 民 33:52; サム上 6:5 (2x), 11; 王下 11:18; エゼ 7:20; 16:17; 23:14; アモ 5:26; 詩 39:7, 73:20; 代下 23:17. アラム語ツレム (š'lem) はダニエル書 2:31~35; 3:1~19 に 17 回。
- 6) ツレムの基本的意味を「像」と捉えるのが適切であると考え、そこから似像, 偶像, 塑像, 肖像, 立像, 影像, 画像などと訳され得る。中国語訳『聖經』は「形像」とする。ドイツ語では Bild が基本となっており、Abbild, Ebenbild, Nachbild, Urbild, Vorbild などの訳語が考えられる。ウルガタ訳では通常 imago と訳される。
- 7) 民 33:52. 王下 11:18. エゼ 7:20. 16:17. 代下 23:17. 偶像としてではないが否定的な意味で使われているのはエゼ 23:14. 詩 39:7. 73:20 (新共同訳は偶像と訳す)。
- 8) ダニエル 3:1~7 参照。
- 9) この動詞の強調形 (piel) は「比べる」を意味する。イザヤ 40:18 ではこの動詞と名詞ドゥムートが共にあらわれる。創世記 5:3 では前置詞 k'+ツレムであるが、詩 58:5. ダニエル 10:16 では k'+ドゥムート; 前置詞 b' をとるのは創 5:1, 3 のみで前置詞 k' をとるのは創 1:26; 詩 58:5; ダニエル 10:16 である。
- 10) ウルガタ訳では通常 (19 回) similitudo と訳される。中国語訳『聖經』は「様式」と訳す。
- 11) 創 1:26, 5:1, 3, イザ 13:4, 40:18, エゼ 1:5 (2 回), 10, 13, 16, 22, 26 (3 回), 28; 8:2, 10:1, 10, 21, 22, 23:15, 王下 16:10, 代下 4:3, 詩 58:5, ダニ 10:16.
- 12) *δομῶμα* / *ῥοθμός* (LXX). *exemplar* / *similitudo* (Vulgata).

- 13) ヘブライ語前置詞 b^e/k^e (ギリシア語前置詞 $\kappa\alpha\tau\acute{\alpha}$) の解釈によって、人間を「神の似姿として」(als zum Bild Gottes) と理解するか、「神の姿に従って」(nach dem Bilde Gottes) と理解するかという問題については別に考察する。
- 14) C. Westermann, *Genesis* (BK I/1 2 1976) 201-203, G. von Rad, 上掲書 37. P.-E. Dion 上掲書 387 等。
- 15) 但し, *Dictionnaire de la Bible, Supplément (=DBSup)* の項目の見出しは “Ressemblance et image de Dieu”. fasc. 55 (Paris 1981) 365-414. *Dictionnaire Spirituelle* の項目の見出しは “Image et ressemblance”. ILVIII-ILIX (Paris 1970) 1401-1425.
- 16) ヘブライ語の 'ādām は LXX が翻訳するように、創 5:1 では普通名詞として神との関係で「人」、創 5:3 では固有名詞として子のセトとの関係で「アダム」の意味を持たせていると考えられるが、Bible de Jérusalem の訳等を除いて、ウルガタ訳、ルター訳、NRSV、TOB 等は創 5:1 も「アダム」と訳す。この問題については、拙稿「'adam の翻訳」『聖書における人物像』(Lithon 1995) 39-68 頁参照。
- 17) 創世記 1 章—9 章の Imago Dei の祭司伝承に於ける文学的構造連関に関しては、別に日本聖書学研究所 (1998 年 3 月 9 日) での筆者の口答発表がある。
- 18) 創 5:1 のヘブライ語ドゥムートを、LXX はツェレムの通常の訳語である $\epsilon\acute{\iota}\kappa\acute{\omega}\nu$ をもって訳し (ウルガタ訳では imago)、イザヤ 40:18 のヘブライ語ドゥムートをウルガタ訳はツェレムの通常の訳語である imago をもって訳すことなどからも考えられる。
- 19) 創 1:26, 27, 5:3, 9:6; サム上 6:11; 王下 11:18; エゼ 7:20, 16:17, 23:14; 詩 38 (39):7, 72 (73) 20.
- 20) T. N. D. Mettinger, “Abbild oder Urbild?“, *ZAW* 86 (1974) 406f. 創 1:26-27 も出 25:40 も動詞「造る」(アサー, 'asā) (+直接補語)+前置詞 b^e の文章構成である。
- 21) ベセル (pesel) は動詞「切る, 切り出す」(パサル, pāsāl) に由来し、旧約聖書の中で 31 回用いられている。
- 22) プラトンの影響, フィロンの思想との関係については C. Larcher, *Le livre de la Sagesse ou la Sagesse de Salomon*, vol. 2 (Paris 1984) 502-505 参照。
- 23) 類字混同. $\acute{\iota}\delta\acute{\iota}\omicron\tau\eta\tau\omicron\varsigma$ とするのはヴァティカン, シナイ, アレクサンドリアの諸写本. アレクサンドリアのクレメンヌもこれによる. $\acute{\alpha}\acute{\iota}\delta\acute{\iota}\omicron\tau\eta\tau\omicron\varsigma$ とするのはタティアヌス等. $\acute{\alpha}\acute{\iota}\delta\acute{\iota}\omicron\varsigma$ であれば, 上述の知恵 7:26 と 4 マカ 10:15 にあるが, $\acute{\alpha}\acute{\iota}\delta\acute{\iota}\omicron\tau\eta\tau\omicron\varsigma$ は他に見当たらない。
- 24) C. Larcher, 上掲書 269.
- 25) 但し, アクィラ, シュンマコス, テオドティオンの諸訳は $\acute{\upsilon}\pi\omicron\tau\acute{\alpha}\sigma\sigma\omega$ で, より

ヘブライ語に近い動詞に訳されている。創 1:26, 28 のラダー (rādā) 「治める」は LXX では ἀρχω と訳されている。

- 26) 上述したように、これは MT でどちらも 'ādām であり、1:27 には前置詞＋冠詞があり、5:1 には前置詞も冠詞も省略されているという違いはあるが、LXX には両者ともに前置詞がなく、冠詞がある。
- 27) 創 5:3, エレミヤの手紙 63, ダニ (Th) 1:13 (2回), 15. 2 マカ 3:16.
- 28) 語根はラアー (rā'a) 「見る」で、ギリシア語 εἰδέα (idéa) の語根がやはり「見る」(εἶδον) であるのに共通する。
- 29) M. Alexandre はドゥムートに関して、創 5:1 が εἰκών と訳されるのに対し、創 5:3 が idéa と訳されるのは、外観のより具体的なニュアンスを言うためであろうと言う。M. Alexandre, *Le commencement du livre Genèse I-V* (Paris 1988) 177.
- 30) J. Schneider, 上掲書 190.
- 31) D. Fraikin, "Ressamblance et image de Dieu. A la Septante", *DBSup.* fasc. 55 (Paris 1981) 405.